

A decorative graphic in the top left corner consisting of a grey square with a white grid pattern and a blue diagonal line.

脱グローバル化エッセイシリーズ 5



2022年10月

脱グローバル化への軌跡： 問われるドイツのレジリエンス

アクセル・ベルガー

今や自明の理だが、私たちは、本質的に国境を越えて重なり合う危機が複数起きている、激動の時代に生きている。約15年前、米国の住宅市場で発生したごく限定的と思われた危機のために、世界金融危機は崩壊寸前の状態まで深刻化し、1930年代の世界恐慌以来の重大な経済危機を招いた (Tooze, 2018)。2007年と2008年の世界金融危機、そして2009年と2020年のユーロ危機は、大幅に規制緩和が進み、高度に相互接続された金融市場の脆弱性を浮き彫りにした。金融危機の経済的・社会的反響は、英国のEU離脱だけでなく、2016年にドナルド・トランプが米国大統領に選出される一因にもなった。いずれの出来事も、経済取引の意図的な制限と、経済のグローバル化を支える欧州連合や世界貿易機関 (WTO) などの国際機関の弱体化を原因とする、脱グローバル化に関する議論において重要な分水嶺となった。

脱グローバル化は、計画的な保護主義だけでなく、世界的な医療危機や大規模な戦争など、より広範な社会的傾向によって引き起こされたとも考えられる。COVID-19のパンデミックは、需要サイドの要因に加え、ロックダウンやグローバルなバリューチェーンの混乱といった供給サイドの要因もあり、経済活動の急激な低迷を招いた。中国政府が厳格なゼロコロナ政策を取った結果、中国経済は、例えば他のアジア諸国と比較して成長ペースが鈍化しているだけでなく（世界銀行、2022）、少なくとも部分的に世界経済から分離されつつある。また、今回のパンデミックにより、大国間、特に米国と中国の間の深刻な地政学的断絶も明らかになった（Kahl & Wright, 2021）。

現行の国際統合モデルにとって最近の衝撃的な出来事は、ロシアのウクライナに対する侵略戦争である。この戦争を受け、G7とその友好国の多くは、ロシアに対して複数の包括的な経済・金融制裁を開始した。ロシアの戦争への対応に関する意見の相違は、国際協力の場を混乱させる可能性をはらんでいる。例えばG20は、ロシアと中国対G7諸国（および、オーストラリアと韓国）という形で分裂している。さらに、多くの非同盟諸国はこの両者の間で巧みに立ち回ろうとし、ロシアの戦争を、幅広い国際関係に影響を及ぼすことのない地域紛争として扱っている。

こうした一連の危機は静かに積み重なり、1990年代の冷戦終結後に出現したグローバル経済統合のモデルに疑問を投げかけている。このモデルは、前例のない貿易システムと金融市場の統合という形を取り、政府間機関や多国籍機関の手厚いサポートを与えられ、主に輸出志向のいくつかの国で高い成長率をもたらしてきた（Baldwin, 2016）。中国のような国々、そしてドイツは、この経済グローバル化の時代の恩恵を受けてきたが、それは多くの場合、社会の貧困層や貿易相手国の犠牲の上に成り立っていた（Klein & Pettis, 2020）。

この「ハイパーグローバル化」(Rodrik, 2011)の時代は終わりを迎えたように思われる。現在のグローバルな経済関係に関する言説は、オフショアリング、サプライチェーンの効率化、ジャストインタイム・デリバリーといった言葉ではなく、ニアショアリング（生産拠点を消費地近くに移転）やフレンドショアリング（信頼できる同盟国にサプライチェーンを構築）、サプライチェーンのレジリエンス、戦略的自律性への言及が特徴的だ。こうした概念の変化は、グローバル化の終焉を意味するものではないが、国境を越えた商取引の減少を特徴とする、新たな地政学的環境を示すものであることは確かである。

ドイツは、このような時代の流れから直接影響を受けている。「中堅国家」であるドイツには、米国や中国のような市場の巨大な力や政治力はない。それでも、その地理的位置付けと経済のダイナミズムから、ドイツの選択や決定は近隣諸国や欧州連合全体にとって大きな意味を持つ。それが最も明白になったのは、ユーロ危機や南欧諸国の債務急増に対する適切な措置が議論された時であろう。その一方、ドイツがグローバルな舞台上で経済的・政治的影響力を行使できるのは、EUを通じてのみである。

以下では、現在のドイツにおける国際経済政策立案の議論に関して、ロシアの対ウクライナ戦争と中国との戦略的競争という2つの大きな要因に焦点を当てたい。

ロシアのウクライナ侵攻開始の3日後、ドイツのオラフ・ショルツ首相は、臨時国会でドイツの政策決定における「転機（Zeitenwende）」を宣言した。現在のドイツの議論は、国際安全保障や国防費の問題を中心に展開されているが、これは同時に、ドイツの国内外の経済政策決定にも強い示唆を与えている。鉄のカーテン崩壊とドイツ再統一後のロシアとの経済関係は、純粋な経済的配慮だけでなく、経済的相互依存を深めることによってロシアを政治的・社会的に変えていこうとするものであった。冷戦期にはすでに「接近による変化（Wandel durch Annäherung）」という考え方がドイツの政策立案の指針となっていた。その影響力はソ連崩壊後も続いていた。このことが最も顕著に現れているのはエネルギー関係の分野であり、ドイツは石油や天然ガスをロシアの輸出に大きく依存している。こうしたエネルギー協力を促す象徴的なプロジェクトが、バルト海を貫くパイプライン「ノルドストリーム2」の建設であった。もちろん、今にして思えば、両国のエネルギー分野での相互依存関係はバランスがとれておらず、戦時にはロシアがドイツに政治的圧力をかけるために容易に利用されかねないものであった。

ウクライナ戦争の開始以降、ドイツとロシアの経済協力はほころびつつある。2022年、ドイツはG7の議長国として、ロシアに対する経済・金融制裁の調整に協力した。さらに、ドイツはカタール、カナダ、セネガルといった国々と新たなガス供給契約について交渉しており、石油と、特に天然ガスの供給を多様化しようとしている。中期的に最も大きな影響を与えるのは、おそらく再生可能エネルギー生産の分野だろう。これまで、気候変動の緩和目標達成に向けたエネルギー生産の脱炭素化の手段として、風力発電、太陽光発電、グリーン水素などの再生可能エネルギーの設備拡張が図られてきた。最近では、再生可能エネルギーの生産は、ドイツのエネルギー安全保障の強化に寄与するものとしても議論されている。ウクライナ戦争によるエネルギーショックがヨーロッパの再生可能エネルギー生産に与えた影響は、中国からの太陽光発電パネルの輸入が大幅に増加したことなどに表れている。

エネルギー分野だけでなく、金属、製造、農業など他の分野でもドイツとロシアはデカップリング（分離）を進めている。こうしたデカップリングは、ドイツが参加している厳格な対ロシア制裁体制だけでなく、ドイツ企業がロシア市場から自主的に撤退した結果でもある。このようなドイツとロシアの経済の分離プロセスがすぐに後戻りするとは考えにくく、中国との相互依存関係をより大規模に拡大する可能性が議論されることになる。

現在、ドイツ経済の政策決定は、ウクライナ戦争の影響を軽減することに重点が置かれているが、中国との経済関係の再調整を怠るべきではない。従来は、対中経済関係もまた「接近による変化（Wandel durch Annäherung）」という考え方の影響を受けていた。2001年、ドイツは中国の世界貿易機関（WTO）加盟を支持し、中国との貿易・投資協力の緊密化を推進した。しかし、中国が大幅な経済的自由化、さらには政治的自由化に向けて変わっていくという期待は誇張されたものであったことがわかった。それどころか、2012年に習近平が権力を掌握して以来、経済における国家の影響力は増大し、中国は多くの戦略的分野で貿易と投資に対する障壁を強化している。こうした動きにより、ドイツの政策・経済界のトップの間では対中関係の見直しが行われている。例え

ば、ドイツ産業連盟（BDI）は、2019年に発表した影響力の大きいポジションペーパー（方針説明書）で、中国を体制上の競争相手と表現している（BDI, 2019）。さらに、ドイツ企業への中国からの投資の増加を受けて、ドイツ政府は、国家安全保障上の利益に反するM&Aをチェックし、阻止することができる投資審査制度を導入した。

しかし、COVID-19のパンデミック時にサプライチェーンが寸断された最近の経験や、電池生産や天然資源（特にレアアース）などの主要部門でドイツが脆弱性への認識を高めていることは、レジリエンス向上のためにさらなる取り組みが必要であることを示唆している。ドイツの輸出依存度と中国の広大な規模を考えると、デカップリングは実現不可能であろう。しかし、ドイツ政府は産業界やその他社会の利害関係者と共に、中国との関係について戦略的な再検討に入るべきである。そのような議論が、新しい「信号機連立」（3党連立）政権のもとで始まろうとしていた。この連立政権では、中国は体制上のライバルとされ、ドイツやヨーロッパの価値観が強調されていた。しかし、新しい対中戦略の策定は、ロシアのウクライナ戦争によって中断された。

ドイツは、COVID-19のパンデミックやロシアの対ウクライナ戦争など、この2年間の動きによって、ハイパーグローバル化の時代は終わり新しい地政学の時代に入ったことを実感させられた。ドイツは、他のEU加盟国と並んで、国際経済協力とルールに基づく秩序の重要な推進者であることに変わりはない。しかし、ドイツの従来型の自由主義的対外経済政策は、地政学的な競争、新たな安全保障上の脅威、経済の脱炭素化の必要性といった状況の中で、そのあり方がますます問われるようになるだろう。このような優先順位の再調整には、世界経済におけるドイツの新しい戦略的指針の策定が必要である。

参考文献

- Baldwin, R. (2016). *The great convergence: Information technology and the new globalization*. Harvard University Press. (邦訳：『世界経済大いなる収斂：ITがもたらす新次元のグローバリゼーション』、リチャード・ボールドウィン著、遠藤真美訳、日経BPマーケティング、2018年)
- Bundesverband der Deutschen Industrie (Federation of German Industries). (2019, January): *Partner and systemic competitor – How do we deal with China’s state-controlled economy?* (Policy paper: China). Retrieved September 19, 2022, from <https://english.bdi.eu/publication/news/china-partner-and-systemic-competitor/>
- Kahl, C. & Wright, T. (2021). *Aftershocks: Pandemic politics and the end of the old international order*. St. Martin’s Press.
- Klein, M. C. & Michael Pettis (2020). *Trade wars are class wars: How rising inequality distorts the global economy and threatens international peace*. Yale University Press. (邦訳：『貿易戦争は階級闘争である——格差と対立の隠された構造』マシュー・C・クレイン&マイケル・ペティス著、小坂恵理訳、みすず書房、2021年)
- Rodrik, D. (2011). *The globalization paradox: Democracy and the future of the world economy*. W.W. Norton. (邦訳：『グローバリゼーション・パラドクス：世界経済の未来を決める三つの道』、ダニ・ロドリック著、柴山桂太・大川良文訳、白水社、2013年)
- Tooze, A. (2018). *Crashed: How a decade of financial crises changed the world*. Penguin.
- 世界銀行 (2022年10月) 『東アジア・太平洋地域 半期経済報告書 2022年10月版：復興のための改革』、以下より参照
<https://documents1.worldbank.org/curated/en/099645009262221948/pdf/P179657034950a06c08cbf06f57e0e52bde.pdf>

Konrad-Adenauer-Stiftung e. V.

アジア経済政策プログラム (SOPAS)

コーディネーション：クリスティタ・マリー・ペレズ (シニア・プログラム・マネージャー)

岩川咲也 (プログラム・アシスタント)

2022年10月25日



The text / The text and the pictures / All articles in this publication are subject to Creative Commons License CC BY-SA 4.0 international (Attribution – ShareAlike)

"Nord Stream 2 Rügen 181007 369.jpg" by juergen.mangelsdorf is licensed under CC BY-NC-ND 2.0. To view a copy of this license, visit <https://creativecommons.org/licenses/by-nd-nc/2.0/jp/?ref=openverse>.